



異分野交流雑感

■ 田窪 行則



40年少し前、博士課程の学生のころ、言語系の学会で講演にいらした、当時京大工学部教授だった長尾真先生の知遇を得た。京大にいるのなら一度訪ねてきなさいというので、訪ねて行って、「日本語の逆引き辞典」を作ってほしいとお願いした。「それはユニークですか」とおっしゃるので意味が分からなかったが、「一意に決まるのか」という意味だった。「ユニークです」というと修士の学生に頼んでくれて、1週間ほどで三省堂の新明解国語辞典から品詞別の逆引き辞典を作ってもらった。当時は逆引き辞典に日本語のものはなく、語構成を考えるとときにひどく不便だった。

それから長尾研との付き合いが始まり、当時助手だった辻井潤一氏や堂下研の西田豊明氏たちと形式意味論の研究会などをやった。長尾先生は月に1回『対話研』といって言語学、心理学、哲学、工学の大学院生や助手レベルの若い研究者が集まって議論をする会を主催されていた。関西だけではなく、日本全国から研究者が集まっており、橋田浩一氏や片桐恭弘氏、まだ修士の学生だった故中村順一氏もいた。心理学の吉川左紀子氏、齋藤洋典氏、三宮真智子氏、言語学では坂原茂氏、山梨正明氏なども常連だった。関西の大学を卒業して地方の大学に就職した人も、関西以外の地域に転勤した人も引き続き参加していた。年に何回かは皆で旅行に行き、私は博士課程修了後韓国に就職していたが、一時帰国して海水浴旅行に参加したこともある。

1990年代前半ぐらいまではこのような異分野交流も盛んに行われていた。このころ長尾先生や堂下修司先生が中心となって文理融合の大規模な共同研究が行われ、安西祐一郎氏や白井克彦氏なども参加して大変刺激に満ちた毎日であった。学習モデルではElman Netというニューラルネットワークに基づいたAIの言語の機械学習の初期の研究が行われていたが、生成文法でよく知られていた言語の制約をモデル化できないということが分

■ 田窪 行則
国立国語研究所 所長

京都大学文学研究科博士課程修了，博士（文学）。韓国東国大学校招聘専任講師，神戸大学助教授（日本語・日本事情），九州大学文学部（言語学），京都大学文学研究科言語学専修を経て，現職。京都大学名誉教授。



かって言語学のほうではそれほど話題にならなかった。

2000年頃になると自然言語処理の研究はほとんど統計に偏り，企業の自然言語処理関係部署で言語学出身者はいなくなり，「言語学者がいると処理効率が悪い」などと陰口をたたかれる状況になっていく。長尾先生が京大総長になられてから，対話研もできなくなっていた。私自身は自然言語処理研究者との交流はなくなり，言語学に理解のある少数の工学者としか付き合いがなくなっていた。本誌から論文投稿の依頼があったのも1995年が最後である。

それから20年間言語学の狭いコミュニティのなかで生きてきたが，気が付くと世の中はAIブームで，人工知能はまずチェスのチャンピオンに勝ち，将棋も囲碁もコンピュータが勝つ時代になっている。Google翻訳はこちらが意地悪さえしなければ，そこそこ実用レベルに近づいている。ある知人はイギリスのある会議で挨拶しろと言われ，日本語で準備した原稿を遊び半分でGoogle翻訳にかけたら，そこそこ通じる英語になり，それをすこし編集して口頭で読んだら，えらく英語をほめられたという。長尾先生が昔提唱していた事例に基づく翻訳を膨大な量のデータでやっているようなものかなとも思うが大したものである。

国語研は，工学部や心理学出身者も多く，文学部を出てから情報工学の大学院に入りなおして工学博士を取った研究者もかなりの数に上る。哲学科出身の研究者もいる。最近は統計数理や自然言語処理関係の研究に触れる機会も多くなってきた。これからそれらの研究者との付き合いを増やしてまた対話研の雰囲気を再現できたらいいなあと思っている。